談会を行うことで、

### 旅と神 道文化

平成21年1月9日(金)午前10時~ 日時 場所 東京大神宮

ŋ

もと、今回の座談会を実施することとなった。 そこで、今回は で、鉄道事業や道路の進捗に伴う社寺への参詣ということが大きな焦点として挙げられた。 町を中心に考えてみたが、 に至るまでの神社、 昨年の座談会では 旅」 神道と欧米文化の流入との関わりを横浜・神戸・伊勢という三つの港 「文明開化と神道文化」というテーマで幕末、 をキーワードにして神道文化との関わりを探ってみるという趣旨の 座談会の中で一つ注目する話題として、 文明開化の流れのなか 明治維新期から大正期

(座談会企画の趣旨

組や旅に関する記事が紹介、 は写真記や旅行記などが出版され、ここ数年は、 近年、 古より、 特にテレビでは聖地の旅、 日本人は旅に対する憧れが強く、さまざまな参詣記や絵図、 特集されているような状況にある 巡礼、 心の旅というようなテーマの番組も増加してお テレビ等メディアでも毎日のように旅 近代に入ってから

関心が非常に高まっているともいえる状況にある。 局として観光庁が発足し、 ったことで観光再生をはたした熊野古道と熊野三山など、社寺を中心とした信仰の道への る。 神宮はいうまでもなく、 今回、 旅文化に造詣の深い 国内経済の発展のため、 四国の八十八箇所巡礼をはじめ各地の霊場、 研究者の方々を招き、 国際観光、 一方で昨年、 旅と神道文化をテーマに据えた座 国内観光の充実が叫ばれて 政府では国土交通省の外 世界遺産ともな

財団法人神道文化会事務局

我国の社寺と旅との関わりが聊かでも明らかになればと考えている。

**神崎宣武**(かんざき・のりたけ)神崎研究室室長・

り現職。

旅の文化研究所所長、文化庁文化審議専門委員。宇佐

、幡神社宮司(岡山県)。 専門は民俗学。 武蔵野美術

大学在学中より宮本常一に師事。以降、国内外の民俗

調査・研究に従事。著書に『文明としてのツーリズム』

『日本人は何を食べてきたか』、『観光民俗学への旅』

『おみやげ贈答と旅の日本文化』、『物見遊山と日本人』、

後、

民俗・文化に関するもの多数 『盛り場の民俗史』、『江戸の旅文化』など旅以外にも

大学院長。 **星野英紀**(ほしの・えいき) 大正大学人間学部教授 財団法人国際宗教研究所理事長、博士(文

学)。大正大学文学部哲学科卒業後、 シカゴ大学に留

大学大学院文学研究科宗教学専攻博士課程修了。前日 同大学神学部大学院修士課程修了。 帰国後、 大正 日本宗教学会常務理事。皇學館大学大学院修士課程修

研究』、『巡礼―聖と俗の現象学』『宗教学を学ぶ』な 山派)。専門は宗教学。著著に『四国遍路の宗教学的 本宗教学会会長、現常務理事。福蔵院住職(真言宗曹

ど多数 出 弘 (やまなか・ひろし) 筑波大学大学院人文

波大学大学院哲学・思想研究科(宗教学・比較思想学 日本宗教学会常務理事。 社会科学研究科(哲学・思想専攻)教授。文学博士 早稲田大学文学部卒業後、筑

博士課程修了。愛知学院大学教授を経て平成十四年よ

宮宮司

アーセンター専門員。 祉学部専任講師。NPO法人伊勢志摩バリアフリーツ の展開と民衆宗教』など多数 教社会学の歴史観』、『初期バイブル・クリスチャンズ 板井正斉 (いたい・まさなり) 同大神道研究所研究嘱託、社会福祉学部助手を経 専門は宗教学、 皇學館大学大学院修士課程修了 西洋史、社会学。著書に『宗 皇學館大学社会福

文に『宗教と福祉』、「地域文化の価値とバリアフリー て、 現職。専門は宗教民俗学、福祉文化論。著書・論

化に関する一考察」、「祭りの変容と「老い」の象徴性 ―神島における二つの外部的要因から―」など。

学部教授、博士 (宗教学)。財団法人神道文化会理事、 **櫻井治男**(さくらい・はるお)皇學館大学社会福祉

司会

は宗教社会学、宗教学、神社祭祀。 経て、平成十一年より、 了後、同大神道研究所講師、文学部助教授、教授等を 同大社会福祉学部教授。専門 編著書に『蘇るム

本祭礼行事集成』など多数

(オブザーバー)

ラの神々』、『宗教と福祉』、『神三郡神社参詣記』、『日

松山文彦(財団法人神道文化会専務理事・東京大神



# 思い出の旅・研究と旅

**櫻井** 櫻井です。本日は司会ということで洵に僭越ですが、この研究所をいつ頃から始めて、どのような活動してこいます。神崎先生は長年、旅の文化研究所所長をお務めです進行をさせて戴きます。まず、神崎先生にお伺いしたいと思

神崎 旅の文化研究所は平成五年に開設されました。研究所の前身は日本観光文化研究所で、これは民俗学者の宮本常いた研究所でした。この研究所は近畿日本ツーリストがスポンサーで、お金は出すが口は出さないというスタンスで支援してくれていました。宮本常一は、社会の大学院のようなもしてくれていました。宮本常一は、社会の大学院のようなもればいいというような機軸でしたが、ある意味、この研究所ればいいというような機軸でしたが、ある意味、この研究所は宮本常一教の信仰集団のようなものでして、それほどの生産性を競った団体ではありませんでした。

直接経営生産と結びつかない社会貢献活動が大事だというこた。ところが、そうした社会に対するいわゆるメセナ活動、の研究所は立ち行かなくなり残務整理をして一度閉鎖しましそんな経緯がありまして、宮本常一が亡くなった際に、こ

生に所長をお願いする形で旅の文化研究所が発足しました。生にも御相談しながら準備を進めまして、民俗学の宮田登先それで、国立民族学博物館の梅棹忠夫先生や佐々木高明先

私は当時、まだ四十後半の頃ですから、まだ若いの頃ですから、まだ若い世代として参画しました。当時は学際化、国際た。当時は学際化、国際た頃で、旅を一番広義にた頃で、旅を一番広義にた頃で、ないか、死者も旅をではないか、死者も旅をするではないか、死者も旅を

した。のが、この旅の文化研究所の学際的な一つの方向性となりまが、この旅の文化研究所の学際的な一つの方向性となりま旅行を単に人間の移動だけではない面で考えてみようという

が発足しました。 ませんが、そういう二つの大きな軸を立てて旅の文化研究所 をしようということになりました。それだけが理由ではあり りました。ですから、 ね。 でも変わらないかと思いますが、留学生が不遇だったんです もちました。それはなぜかと申しますと、平成五年当時、 際社会で何ができるかというのを考えてみようという方針 が国際社会に出ていくということだけではなくて、日本が し、大学での外国人籍の教員も採用が非常に難しい時代にあ それからもう一つ、 日本学術振興会の学術振興基金がもらえるわけではない 特に留学の大学院生に手厚い 国際化。 国際的という意味では、 研究助成 我 玉

いる状況です。いわば、塾のような研究所です。 実際は、事務局と所長を含めた数人の運営委員で運営をして究所所員を委嘱致します。その関係で専任所員がいません。そのため、大学院生や留学生を中心に一年ごとに旅の文化研大学院生、特に留学生に手厚く研究助成を致しております。大学院生、特に留学生に手厚く研究助成を致しております。この研究所は、研究所独自で研究者を集めて特定のテーマこの研究所は、研究所独自で研究者を集めて特定のテーマ

櫻井 神崎先生がこれまで旅文化の研究に関与されてきた

されていますが、先生御自身の御研究と旅という点でお話て先生がお伊勢まいり、江戸の旅文化について御著書を刊で一番思い出深い旅をお聞きしたいと思います。それと併経緯がよくわかりました。それでは次に先生にとってこれ

行せま

神崎 年をとりますと最近のことが覚えにくくなって

戴ければと思います。

のすすめもあって、チベット人集落の民族調査隊へ参加するのすすめもあって、チベット人集落の民族調査隊へ参加する師匠の宮本常一は武蔵野美術大学の教授でしたので既に知り后っておりましたが、私は民俗学の「み」の字もほとんど理合っておりましたが、私は民俗学の「み」の字もほとんど理合っておりましたが、私は民俗学の「み」の字もほとんど理合いである。

ことになりました。

この時代は、文化人類学がまだ「民族学」と言ってい

た時

レベルでしょうか。レヴィストロースもターナーもマリ

つたわけです。万が一、何かの事故で亡くなり現地で葬られ般の研究者にとってはチベットは手がつけられない地域であたのです。まだ日本が中国との国交がない時代ですから、一とうかといった人たちがチームを組み、日本民族学会の重鎮程を終えたような人たち、つまり大学の助手や講師になるか代でした。東京都立大学とか、あるいは早稲田大学の博士課代でした。東京都立大学とか、あるいは早稲田大学の博士課

うに思います。

それと同時に、

チベットへ入るという無謀な調査隊が組織されたんです。は入国できませんでしたからネパールからヒマラヤを越えてても仕方がないというようなことで行きました。中国側から

そこで学者以外に必要なのが鉄砲玉と医者なんです。

ティーを安全に導かなければいけない。そうすると頭は要らシェルパと一緒にルートをつくって、食糧を確保して、パー玉というのは、ルートが明らかでないんですから、先発して

りました。その講義は、今でいえば大学院生位を対象にしたない、体力だけというのが必要ですし(笑)、私はそのころない、体力だけというのが必要ですし(笑)、私はそのころない、体力だけというのが必要ですし(笑)、私はそのころない、体力だけというのが必要ですし(笑)、私はそのころない、体力だけというのが必要ですし(笑)、私はそのころない、体力だけというのが必要ですし(笑)、私はそのころない、体力だけというのが必要ですし(笑)、私はそのころない、体力だけというのが必要ですし(笑)、私はそのころない、体力にはない。そうすると頭は要らた。その講義は、今でいえば大学院生位を対象にしたりました。

ベットの旅で後々の自分自身の活動に繋がる勉強ができたよしいので帰国してから本を読むようになるんですが、このチスキーも、柳田國男もわからないような状態での耳学問。悔

-、小田晋さんや黒田信一郎さんが話している内容から、私世に興味を持つようになりました。それはチベットへの道

私は歴史が専門でもないのですが、

近世

P

中、

とになりました。そこへ行くまでにタライ(平地)から、 番国境に近い、一四軒七六人のチベット人集落で越冬するこ チベットへ入れなくて、標高三、七○○メートルくらいの一 自転車さえもない。とにかく歩く。結果的には国境を越えて ろん文明の利器はありません。電気がない、自動車はない、 たちは今、中世の旅をしているんだと思ったんですね。 もち 四 の 本でいうところの中世の旅に近かったのだろうと今でも考え

を持って出て、小麦と塩を持って帰るというのを半期ごとに しない限り、岩塩だけでは生命の持続ができません。 しょう。たとえば、チベット人はインドへ出て海の塩を入手 いうと、食わんがための必然があるかないか、ということで それでは、なぜ中世の旅か、近世の旅とどこが違うのかと 毛織物

ありましたが、やはりいい経験でした。

十日歩きました。四十日毎日徒歩の旅をするのは、

難儀でも

もありました。 方もできるのですが、当時のチベットはそういう家族構成で い。兄貴が旅に出ているときは弟が奥さんを使っていれば やるわけです。ですから、彼らにとっては奥さんは一人でい いし、弟が出れば兄貴が居残る。人口調整の方法だという見 1/2

飲食の提供装置もないということですから、その意味では日 されます。 んですね。 道はありましたが、途中の宿場に相当するものが未発達な 野宿とか、 宿場がほとんど整備されていないということは 軒の下を借りたりという旅を余儀なく

> ています。それが体験できたのが今にして思えば、 しかしながら、 無謀なるが故の良き思い出だと思っています。 その経験が以後に生かされているかとい う

ちょっと他では難しい トの時のような、あれだけの中世的な旅への回帰というのは すから。私は東南アジアが好きでよく行きましたが、チベッ と全く生かされていない (笑)。やはり、日本は便利な国で

チベットでの体験以後に私は民俗学、フォークロアを本格

う仕方がないかもしれないですね、人間のコミュニケーショ ら(笑)。余分なものが出なくなってしまう(笑)。それはも かをきっちり固めて聞こうとすると思考が固まってしまうか 社会構造が影響しているのかもしれません。 査が非常に下手になっていますね。やはり現代の人間関係 き取り調査が大事なのですが、年々、後退しているのではな 的にやるようになるんですが、最近感じることとしては、 いか、ということです。私が知る限りは、学生の聞き取り調 どのように聞

その人たちの本音に近いところで我々がいかに代弁できる な話題がたくさん出るか。それを取捨選択することによって、 踊ったりということを通して共感するところで、 いかに不要

ンのあり方の問題ですから。

だから相手の本音というのは、

結局、飲んだり食べたり、

か、 た。チベット人集落の話に戻ると、小さな村ですから食糧 ということを私たちはフォークロアのなかで教わりまし が

した。その間、それぞれフィールドノートを持ったり、カメ て、乾燥して、軽くして持って帰るということをしたりしま ですが、アルファ米というオカボの本当に雑な米を一回蒸し 調達できない。そのため私が麓まで買い出しに行かされるん

どぶろくを持って来て、それを一杯飲んだところで村の全員 毛沢東の使いだと思っていた。だから、本当のことは言わな が謝まったんですよね ラを持ったりして家を回って、聞き取り調査もやりました。 いようにした(笑)。話していることは全部うそです」と 一カ月近くして、村長以下村の幹部が五人来て、夜にまずい -しわけなかった。我々は今まで、 あなたたちのことを

がいかに難しいかということを教わりました。 かったから、これからは本当のことを話す」 「あなたたちの正体がわかったし、いい人だというのはわ というようなことになりまして、はなから人の話を聞くの

ない、ということ。 やすということだと思い知った。私は四十代位まで、聞き取 に入っているとしたら、 とにかく飲み食いに、 フィールドで人の話を聞くのを急が 労働に、時間を費

以後、そこで学んだことが多少とも私の行動パターンの中

うなものではないです (笑)。 もしれませんですが、その程度のことで、他に何ら誇れるよ 属しないで民俗調査を行ってきましたからできたことなのか り調査を多くやってきました。幸いにして決まった組織に所

すよね。 世的なの旅というのは、本当に国内ではもう体験できないで の旅文化などもお話し戴きたいと思いますが、 **櫻井** ありがとうございます。後でまた、江戸時代の日本 神崎先生、中

れた色々な先生方に刺激を受けられてということですが、チ 神崎 櫻井 なるほど。 できないでしょうね 神崎先生はずっと民俗学の研究で出会わ

れているように思えますね

そうですね

ベットへの旅での様々な出会いが先生にとり強く印象づけら

点についてお願いします。 いると思います。怪しげな旅も(笑)。どうぞ、先ほどの二

ですね(笑)。今も、さあ、自分にとっての旅とは何かなと 私は神崎先生のようにドラマティックな旅

八年生まれで、昭和二十年には終戦でしたので、東京で生ま

思っていました。自分にとっての印象的な旅、 が入ってないと思い出にならないと思いますが、 **櫻井** それでは、次に星野先生。先生も色々な旅をされて 個人的な思 私は昭 和



から、 りまして、 目なんです。私は子供の が全く覚えておりませ 出てきたんです。 両親は新潟の人であ 私は東京では二代 新潟から東京 です

して、そこに母親の両親がおりました。 頃 中の国仲平野の寺の娘で 母は三人姉妹の一番 母親は佐渡のど真ん

んていうのはできないので、親はちょうどいい調子で実家に ました。当時は戦後間もない頃ですから、とても家族旅行な 皆集まって、私と同じ年位から、上から年下まで沢山来てい ながら私は二~三週間滞在していました。従兄弟が十人位 から、広いので本堂の脇の間みたいなところに、ゴロ寝をし 夏になると子供たちは全員、孫を連れて実家に帰る。寺です そのため、祖父母は年寄り二人で佐渡に暮らしておりまし 母の姉妹も三人とも全部、 東京へ出てきていましたので、

継がなかった。

私の父と結婚をして東京に暮らしていまして、実家を

家に長い間滞在していましたので、私にとっては、非常に佐

そこに付与されているということですね。他にも色々と海外

東京に帰っちゃうんですね。私たちは母の実

いていって、

渡 育ちで故郷がないのですが、それだけに逆に佐渡を非常に懐 への旅、 佐渡という場所が一種の故郷。 東京生まれ 0

て疎開はしたようです

供には嬉しかったりして(笑)。冷房もありませんので窓を 大人は皆、嫌がっているんですが、急いで窓を閉めるのが子 トンネルというのがあって、蒸気機関車ですから物凄い煤煙、 かしく思います。 当時は新潟まで上越線の夜行で行きました。 S L で旧

子供はトイレまで行けないので。そういうのが一つずつ懐か 自分がしたのか、隣の子供がしたのか知りませんが 混んでいましたので、窓からおしっこをしたこともある(笑)。 親は随分文句を言っておりました。小さい頃には車両が随分 開けてないといられない、というような思いもありましたし、

しい思い出です。

何の変哲もないところですが、つまらないところでも価値 いう所で何も面白いところがなくて(笑)、 すからあるのですが、行くと昔のことを非常に思い出します。 に懐かしくて楽しかったですね。今でもその母の実家は寺で しようと。田舎の五十年位昔の景色が蘇ってまいりまして、 おりまして、去年みんなで、是非、叔母さんを囲んで食事会を 現在、 佐渡の国仲平野というのは、佐渡のくせに海が見えないと 私の母は亡くなりましたが、 母の妹が百歳で東京に 田んぼばかりで

の生き方の中でリアルな、 ところは沢山ありましたが、 も行きましたし、 ルルドの泉とか、 昔ふうの言い方で実存的な意味が 佐渡への旅が一番自分にとって 海外でもなかなか 面白

61

ある旅かなと思っています。

所巡礼、 で旅と研究との関わりでは四国遍路を長年研究してい なってしまったのかなと思いましたが ような存在だなんてことを言われて、 研究の第一世代で神棚に飾られるような、 会がありまして参加致しました際にその方々からは私は巡 ~六年前ですが、 それから、私の旅に関する研究ですが、 四国遍路を宗教学の立場から研究しております。 巡礼研究をしている東西の学者が集まる機 ああ、そういう世代に (笑)。そのような訳 私は四国八十八箇 神上がっちゃった ます。 礼 Ŧi.

していました。 で言っていましたが自宅にゼミ生を集め、夜を徹して勉強を 彼のゼミでは毎週一回、 関心を持っていてゼミ生を集めて研究会を持っていました。 いらっしゃいまして、彼は晩年だったのですが、巡礼研究に た際に、文化人類学者のヴィクター・ターナーがまだ教授で 加えてビールを山ほど買って、好きなだけ飲 眠たい奴は寝ろみたいな世界でもありまし 彼自身は「コミュニタス」だと自分

直接的なきっかけとしては、

私がシカゴ大学に留学しまし

の巡礼を調査していて、神父さんを連れて学生に道案内をや

(笑)。

そういうの

b

面白かっ

た。

加えて彼がメキシコ

りますし、

扱

1/2

場から考察すると何とか理解、

話ができるんじゃないかなと

それが宗教学の立

歴史的には歴史学者や国文学者の巡礼研究というのはあると ないということがわかりまして、特に宗教学では全然なくて、 かと考えてみると、巡礼研究というのはほとんど行われて のきっかけですね。 らせていました。 ターナーとの出会いが私の巡礼研究 それで帰国して翻って日本ではどうな の 直

取り組んだ訳です。

四国を選んだのは、

私は実は真言宗の僧侶でして、

加

玉 は 思いますが、宗教学の立場から研究してみようということで

からいいじゃないかって言うのですが、実はなかなか、 弘法大師、 真言宗じゃないかと。 皆は自分の宗派のところだ

かなり仏教教団 ぜ奇跡が起きるんだということです。民衆的な大師信仰は 側にとっては自分には起きないことが、 うのは非常に扱いにくい話であります。 ですね。これはお坊さんたちには扱いにくい。 足が治ったとか、そんな話が地元にはゴロゴロしているわけ すが、現世利益の凄いところでして、重い病気が治ったとか ていますが全く史実ではないわけですね。 四国八十八箇所は弘法大師、空海が開いたということになっ はいかない。真言宗だからというほど事は簡単じゃなくて、 に困るということがある。 の論理とは離れているし、 お参りをする人にな 簡単に言えば、 対立するときもあ 最近でこそ違いま 現世利益とい

ある意味、すき間産業みたいなものですが。から余り研究している人がいないということもありまして、思って四国遍路を研究しました。四国遍路については宗教学

ものが巡礼にあるというのが、面白いなと思って私は研究しありながら、実は教団になるというような狭い世界を超えたところがありまして、制度的な教団の枠に入っているようでとは思いもしませんでした。聖ヤコブのサンティアゴ(スペですから、当初は、四国遍路が現在のようなブームになるですから、当初は、四国遍路が現在のようなブームになる

という話にどうしても比重が行くのかなというようなふうに何かそういうふうに枠に入らない巡礼というか、聖地まいりを研究してまいりましたので、きょうも巡礼の話が出ますと、を研究してまいりましたので、きょうも巡礼の話が出ますと、の手前の古市の遊郭へ遊びに行ったのかよくわからないといの手前の古市の遊郭へ遊びに行ったのかよくわからないとい隔参詣は余り面白くなくて、お伊勢まいりに行ったのか、そ

が本部や教祖のところへ行って、研修をするというような遠

てまいりました

ですから、例えば非常に厳粛な、

厳格な、

信仰を守る教団

シカゴ大学へ来てからですか。 櫻井 ヴィクター・ターナーが巡礼研究に取り組んだのは

うところの「まれびと」的存在だったのかも知れません (笑)。

ナーは旅人といいますか何といいますか、

折口信夫でい

は思っております。

知っている範囲だと、あの人はスコットランド、グラスゴー年代)にコーネル大学へ呼ばれた頃ですね。少なくとも僕のシカゴ大学の時代ではなくて、一九六〇年代後半(昭和四十星野 ターナーがコミュニタスというのを言い出したのは

の出身ですから、イングランドのオックスブリッジ(オック

ナーは、これには非常に喜んで、「これでやっとスコットラ出ますが私がシカゴにいた頃に油田が発見されまして、ターですね(笑)。今は、スコットランドに油田があり、石油がスフォード大学、ケンブリッジ大学のこと)は大嫌いなわけ

カの社会に対峙している学生たちに大変人気がありました。 これでは、大学紛争でめちゃくちゃのときで、そのなかで、地類の影響、大学紛争でめちゃくちゃのときで、そのなかで、したから、一九六九年というのはアメリカの大学がベトナムしたから、一九六九年というのはアメリカの大学がベトナムしたから、一九六九年というのはアメリカの大学がベトナムしたから、一九六九年というのはアメリカの大学がベトナムの影響、大学紛争でめちゃくちゃのときで、そのなかで、カゴへはちょうど昭和四十四(一九六九)年に私は留学しましたから、一九六九年というのはアメリカの大学がベトナムしたから、一九六九年というのはアメリカの大学がベトナムした。

に置いてあって、「好きなように飲め」みたいなことを言っを開けましてビールを、バトワイザーなど山ほど買って廊下言ったようにオープンハウスと彼は言っていましたが、家中

学生たちは物凄くそれが好きで講義は自宅で行い、さっき

て、部族の儀式はどうだとかいうような話ですが、その後のていました。しかし、彼の話す学問の話は非常につまらなくに置いてあって、「好きなように飲め」みたいなことを言っ

使って論文も幾つか書いていますが、余り大成しなかったし、ミ生にメキシコの神父兼大学院生がいましたので彼を案内にターナーはその頃、巡礼の研究を始めていまして、彼のゼしかったですね。当時の時代背景もあったとは思いますがね。

話が面白い。

常に四十~五十人の学生が来ていて、非常に楽

巡礼研究としての枠組みはコミュニタスと言ったけれども、け違うんだとか、酷いことを言う人類学者がいたりして(笑)。さんと一緒に出しましたが、それは一般の観光案内とどれだその後にヨーロッパ社会におけるキリスト教の巡礼の本を奥

のがありましたよね。 (網球) ではいるので、奥さんとの共著で熊野のことを扱ったに翻訳されたもので、奥さんとの共著で熊野のことを扱った (場が) がありましたよね。

彼自身のモノグラフとしてはイマイチだったと思います。

じですね

私は旅について先ほど神崎先生のような非常に面白

ドラ

み歩いていましたね (笑)。日本へ来たんですね。日本では、ほとんど毎日、深夜まで飲

星野

ああ、ありましたね。

彼は日本学術振興会の招きで

ど (笑)。

櫻井

私は、

凄くまじめな学者だと思っていたんですけれ

山中 いや、私はイギリスに留学していた時は、それこそ対抗するのでは(笑)。山中先生はウエールズの方でしたか?ングランドに対抗という点では、山中先生もイングランドにさて、先ほど、ターナーのことでスコットランドという、イ

意識を持っているというのはよくわかりますね。やはりイギスコットランド人で、イングランドに対して非常に強い対抗マンチェスターにいましたので、今の話を伺ってターナーが

たと思いますので理解されているかと思いますが、そんな感も確か、ケンブリッジ大学に少し留学されていたことがあったと一つに纏まって考えてしまいがちですが、ウエールズもだと一つに纏まって考えてしまいがちですが、ウエールズもリスには、強い郷土意識がありますね。何となくイギリス人

たが、私自身はそういうドラマティックな旅という思い出はんの『未開の顔』に出てくるような話を思い出したりしましんの『未開の顔』に出てくるような話を思い出したりしまして、チベットの方には余りいらっしゃったことがないのかなで、チベットの方には余りいらっしゃったことがないのかなってィックな体験などありません。神崎先生は民俗学者なのマティックな体験などありません。神崎先生は民俗学者なの

余りなくて、旅は沢山致しますが、それほど長い旅でもあり



りません クなものもある訳ではあ ませんし。ドラマティッ

ただ、星野先生 のお話 の記

か二週間、一人で実家に預けられることがありました。 の実家が愛知県ですので、小学生位に、たまたま夏に一週間 京出身ですが、私の母親 記憶があります。私は東 も星野先生と似たような 憶ということで言うと私 を伺って、確かに旅 私の その

人に会ってホッとするというか、旅にはそういうワクワク感 れないなと思いました。 旅が持っている楽しさというのはそのあたりにあるのかもし 頃だったせいもあって物凄く強く印象に残っていて、やはり 持っている独特の不安感、ワクワク感。それは確かに小さい 年齢は星野先生よりは若いわけですが(笑)、でもあの旅の 時には東海道本線に乗って、要するに一人で旅をしたんです また、最終的に父親が迎えに来てくれて、その時に親しい その時、窓を開けると煙が入ってくるような情景、

って、先ほどの放浪者というのは、ターナーがそうだったか と不安がある反面、 最終的に戻る先があるというところがあ

> くというようなスタンスと、それからもう一つ、非日常から 憶にあるなと思い出しました。 お話を伺いながら、なるほどなと思い、私もそんなことが記 面白さというか本質があるのかも知れないと。今、両先生の 出ていくことを繰り返していくというような、その辺に旅 やはり最後は戻って日常の中に入っていく。また、そこから どうかはわかりませんが、いつも不安を抱えながら動い

じられるようになってきたんだということを感じています。 趣味というか関心ということだけではなくて、もっと広く論 いうことが大きな流れになっていることは、ある特別な学者の いますか、国内全体がある種の旅とか巡礼とか、聖地とかと ていませんでした。その意味では、今のような旅ブームとい ましたが、それが自分自身の研究の対象になるとは余り思っ の関わりを勉強しておりまして、それまでは旅自体は沢山 ませて戴いたりしております。色々な形で最近、旅と宗教と ーリズムについて研究するようになり、神崎先生の著書を読 私自身の研究の面でいいますと、ここ五・六年は宗教とツ

学生を連れて行って、そこで宗教者や参詣者から色々なお話 出羽三山とか立 ます。神崎先生もお書きになった相模の大山とか、あるいは 教学実習という授業があり、聖地、 加えて研究者としての観点でいいますと、筑波大学では宗 山 御嶽山とか熊野とか、本当に色々な山に 聖山に学生と一緒に行き

思っています。 うな体験も種々あったりしまして、旅というものは面白いと り、そういうことを通じて自分自身が変わっていくというよ ようなことがわかって学生も自分も「なるほどな」と。 中で自分自身が大学の中で生活しているときにはわからない と、一つは直接的には色々な方々への出会いを経験し、 その つま

を伺ったりしますが、そういう中で結局何を感じるかという

か割とハードな側面で問題を考えていたんですが、そうじゃ 私はどちらかというともともとは、 ュニタス的な状況が起こって、そういう中で宗教の関わり、 出て、そういう先ほどコミュニタスと出ていますけれどコミ 神道だけではないと思いますが、出羽などの山伏さんとか、 色々なところでお話を伺うと、 宗教というものを組織と お酒が出て、踊りが

なくて生きられている部分ですよね

なことで宗教学実習の授業をしております。 たいし、自分もその中で学んでいきたいというような、 にあると感じさせてもらう。そういうことを学生にも味わせ あって、そういう中で体とか雰囲気とか、色々なものがそこ 活のレベルの中に染みこんだあり方として生きられた宗教が はなくて、外側から見ると宗教という話ですが、もう少し生 そこで生活している人々には宗教と別に意識している訳 世界遺産というのが非常に大きな話題になっています 私の最近の研究 そん で

ではないでしょうか。

が

あると思っています。

そんなところが私の研究との関わり

星野先生が仰っていましたが、やはり離島に本当の意味で 宗教と文化が残っているのではないかと。 にしようという動きを調査しています。 ので、この四年くらい長崎のカトリックの教会群を世 先ほど座談会の 長崎は本当に海岸 界遺

では教会が維持できないというような中で、ある熱心なカト では過疎化というような状況が最も強く出てきてしまう 合でも、かなり苦労して行かなくてはならない。逆に、 ころに教会を作っているんですね。ですから、教会に行く場 隠れて生活をしていた隠れキリシタンの方々は人の来ないと 線が最も全国で長くて、離島が沢山ある地域ですが、離島 今日

いはこの座談会の持っている意味も含めて非常に大きい意味 巡礼がキーワードになるというのは、やはり今の時代、 がさき巡礼」が果たしてうまく行くかどうかは別問題です 巡礼を長崎県の重要な観光資源にしようとしています。 がさき巡礼」という言葉を造語しまして、キリスト教会への 言った観光ブーム等に乗っていくというような状況が起きて せないだろうかという運動を起こされまして、それが先ほ ろうかと思案して、その手段の一つとして世界遺産にして残 リックの信徒の方が、これを残すのにどういう手があるんだ います。長崎は今、その観光のターゲットの一つとして「な

**-76-**

旅と宗教文化との関わりが凝縮されているような感がありま ほぼ一時間が経過致しまして(笑)、しかし、その話 櫻井 少しずつ整理しながら次の話題に行きたいと思います ありがとうございました。 何か三人のお話を聞い の中に 7

1/2

ムになるというのは、 ではないかと思いますが、例えば日本の歴史の中で旅がブー 外国の歴史の中でも旅のブームは何度か大きな波があったの 非常なブームになっているというお話でしたが、わが国 先ほど、 山中先生が仰っていましたように現代では、 時代的にはどうなんでしょうか。 神崎 旅 が

### 旅の歴史

場の整備というものがあったり、あるいは飛行機が出てきた ろの高度成長期が来るわけですね。 ね。そこで伊勢参宮に代表される庶民の旅が発達した。 も元禄から文化・文政くらいが一番安定していたと思います かないですよね。 て経済がそれなりに裕福であるという条件を外すわけには その後は戦後にワープ致しますが、私たちがよく知るとこ 幾つか の 江戸の幕藩体制二百六十数年の間、なかで )理由はあるでしょうが、社会が安定してい そこでは街道の整備、 宿 ŲΣ

> り、 その後一世代くらいの間隔、 やはり社会・経済の長期的な安定というものが前提にあり、 ームが出てくるような気がしますね ·わゆるハード面での旅を促す条件というのもあります。が 鉄道が高速化したり、 自動車交通が発達したりという、 ちょっと時代がズレて旅行のブ

う動きが出る。 るのですが、ちょっと経済成長がズレたときに、またそうい これが面白いのは昨年、観光庁が発足したことにも象徴され エネルギーで旅が発達する。それから、 それから今、山中先生が仰った「ながさき巡礼」の話です。 高度成長が安定した段階では民衆が中からの 高度成長が不安視さ

ります。元禄の自然発生的な旅の隆盛と、文化・文政での旅 平成の時代を考えると、昭和元禄に対して、もしかしたら文 の隆盛というのは、 る何らかの経済政策が作用したのではないか、 ちょっと意味が違う。 そうすると、今の

参り」が爆発的なブームになったのも、

庶民の旅行熱をあお

という説があ

江戸期の文化・文政年間の時がやはりそうですね。「おかげ

れる段階では行政がそれを後押しする形が出る。

化・文政期のあたりへ歴史的には符合するのではないかと思

います。

がちでして、今や観光立国、 ないから観光でも機軸にしようかと。 とくに公共の経済投資が鈍ると、 観光立県が連呼されるようにな もっと大型投資の資金が そういう幻想を持たれ

というのは、

行政の目玉がそこへ集約されているような気が致しますね。りました。全国各地で地域おこしは観光おこしということで

山中 例えば一九八○年代半ば位から、

世界全体の産業の

中で、最も大きな産業というのが観光になったということが中で、最も大きな産業というのが観光になったということがかなり自然な状態を呈してきて、そして各国、各いうことがかなり自然な状態を呈してきて、そして各国、各いの人々が、今の現実とはちょっと違ったものを見たいといめの人々が、今の現実とはちょっと違ったものを見たいというような具体的、心情的な欲求とか、そういうものが出てくるようなことが挙げられます。

と思います。

として観光というものを志向するというようなものがあるかとして観光というものを志向するというようになっていると観光そのものが非常に世界全体のブームにう意味で考えると観光そのものが非常に世界全体のブームになっているという経済的な要因ということが勿論、ある種当然国民は国内で働き生計を営むということが勿論、ある種当然の逆として、もうちょっと心の問題、人々のマインドの問題の逆として、もうちょっと心の問題、人々のマインドの問題の逆として、もうちょっと心の問題、人々のマインドの問題のがあるかとして観光というものを志向するというようなものがあるかとして観光というものを志向するというようなものがあるかとして観光というものを志向するというようなものがあるかとして観光というものを志向するというようなものがあるかとして観光というものを志向するというようなものがあるかとして観光というようなものがあるかをとして観光というものを志向するというようなものがあるかとして観光というものを志向するというようなものがあるかとして観光というというによっている。

なというような。

文明論に従うと装置系、制度系が整ったという見方ができるが国境を越えて往来するというのが実態ですが、梅棹先生のクバンになるのではないか、というような予想をしたんですム。仰る通り、近年では、国際化の流れの中で、まさに人々の文化研究所」を平成五年に創設した際の記念のシンポジウの文化研究所」を平成五年に創設した際の記念のシンポジウムで、私たちは平成二十二(二○一○)年あたりが観光ビッムで、私たが、が、本にど申し上げましたように「旅

的欲望だけではない精神的なもの、渇望のようなものが生ま知らない所を実際に行ってみて知りたいという、かつての知ったようなマインドの問題が生じてきたのでしょう。つまり、ものだといえます。つまり、航空機がこれだけ全世界を繋げものだといえます。つまり、航空機がこれだけ全世界を繋げるよう、、これは飛行機事情の進歩による

安定がどこまで続くか、そのなりゆき次第でしょうが。ブ・ツーリズムへの展開をしております。が、これも社会のと、ともいえるでしょう。現代の旅は明らかにオルタナティー値観の見つけ方ができるようになった社会ならではのここれは、情報が高度に発達した情報化社会の中での多様な

**櫻井** そうした意味で神崎先生、旅の歴史といいますと、

れてきたというのは私も薄々感じています。

したね。美味しいものでも食べに旅をするとか、単なる知らは旅に何を求めているかと点で、「心」という問題がありまと対比してお話し戴きましたが、そうした中で、今の人たち長過ぎますので、先ほど、現代の旅ブームと江戸時代の状況人類はその誕生の時から旅をしているといいますと、物凄く

たと思いますが、聖地というのは一体何なのか。そこをお聞と思うのですが。先生方はさまざまな聖地をめぐって来られそれをどう捉えていくかということでお話を展開して戴こうそこで本日のメーンテーマである「聖地を訪れる」という、

をさらに探ってみたいと思います。

ない地を訪れたいということだけではない、何かというもの

みというのがありますでしょうか。 星野先生、聖地の性格とか姿という点で何の類型とか枠組きしてみたいと思います。

**星野** 例えば旅における非日常性というようなことを言いただ、四国遍路などを見ていて、インドなどでも報告を見たうすると、やはりそれは非常につまらない話で、日帰りの離れていたら非日常性なのか」ということになりますよね。離れていたら非日常性というのはどのくらい日常性からますと、「じゃ、非日常性というのはどのくらい日常性からますと、「じゃ、非日常性というのはどのくらい日常性からますと、「じゃ、非日常性というようなことを言いただ、四国遍路などを見ていて、インドなどでも報告を見ただ。

ると同じだと思いますが、例えば東京には四国八十八箇所巡

次に、これはよく言われることですが、「聖地というのは

これは江戸の末期に成立したのですが、これには、私が住ですね。

三箇所巡礼へ行きたいとか、次は本場の四国八十八箇所巡礼にどこへ行きたいですか」と聞いたら、やはり次は西国三十八箇所の巡拝者がいませんでしたから巡拝者の人たちに「他を悉皆調査をしました。年間四百人ちょっとしか御府内八十職をしている寺も入っていまして、一年間にわたって参拝者

そこへも思いを四国へ行った人は馳せるとか、そういうようにあることがわかります。東京の中の八十八箇所にも、またはり、そこには一種の巡礼の重層性といいますか同心円の中へ行きたいという人が非常に多いわけですね。そうするとや

な聖地への思いというのがあると思っているんですね。

うところが多分にあるのではないかと思いますね。がの教会を見たいと言えば、フランスもいいし、イタリアもいいし、ポーランドもいいだろう。皆、それは一つの共通のいいし、ポーランドもいいだろう。皆、それは一つの共通のいいし、ポーランドもいいだろう。皆、それは一つの共通のいいし、ポーランドもいいだろう。皆、それは一つの共通のですから、これは今たまたま八十八箇所の巡礼で例えましですから、これは今たまたま八十八箇所の巡礼で例えまし

- 79 -

で見ているのだ、ということもあるだろうと思います。 とをすると、実は聖地に行く人にとってみては全く別の視野 めて近接しているんだと。だから聖地へ対する第三者的な見 あんなことをするんだというけれども、 いうのがありますね。何であんな雪山の寒い凍えそうな所へ、 だから南米、ペルーなどで雪山の中に十字架を立てる巡礼と 遠いんだけれども、それこそ心の問題としては近い」と(笑)。 研究者が離れて鳥瞰的に見て、遠いとか近いとか言うこ それは心の中では極

に重要だと思っています。 いうか、価値の付与というものは、 ゆえに僕などは聖地を巡っている人を主体とした価値観と これは宗教の研究に非常

行くという、そういう巡拝の広がりというような意識は、 における伊勢となって、ここを出発して、さらに実際の伊勢へ たいのですが、東京の方々にとってはここがある意味、 話された「御府内八十八箇所巡礼」の話に関連してお聞きし らに改めてお祀りされている神社ですが、先ほど星野先生が には伊勢の神宮の東京における遥拝所としてお伊勢様をこち 今日の会場は東京大神宮。つまり東京のお伊勢さん、歴史的 角の機会ですので、松山宮司さんにもお聞きしたいのですが、 東京大神宮宮司でもある松山文彦宮司さんがお見えです。折 オブザーバーとして、この座談会に神道文化会の専務理事で、 櫻井 星野さん、ありがとうございました。さて、今日は

拝に来られた方々の中で

しょうか 生まれていっているんで

伊勢に行く方向に ればいけないわけです して訴えかけていかなけ て、参拝される方々に対 松山 いや、実際には、 向

道していますから、それと神社での活動がマッチングして実 くのメディアが御遷宮について色々な角度から取り上げて報 だということは常に発信するようにしています。今現在、 り東京大神宮は東京におけるお伊勢様をお祭りしている神社 るでしょうから、これはいいことだと思っていますし、やは これはまた、他の神社にお参りした際にも多分そのようにす すよ」ということは素直にキチンとやってくれているわけで、 しなさいと言って欲しいんですね。ですから、「手水はこう るまで、割と神社についての知識について、あれこれ、こう で良縁を求めるとか、あるいは参拝の作法は手水の仕方に至 もあります。 いうふうに使うものですよ」とか、「お参りの仕方はこうで は、とにかく若い女性が大変多いものですから、例えば祈願 今、 東京大神宮へお参りに来られる方々の多く が、なかなか難しい現実

際に伊勢の神宮へ行かれる方は結構いるんじゃないかとは思 います。

4)

です。現在、 こともないお宮なのに」といわれたというような話も聞く訳 ウチは伊勢神宮へ寄附しなければいけないんですか。行った の社会はまだまだゲマインシャフト(共同体)ではあります 財の依頼が来ているのも承知しております。檀家や氏子たち 伊勢神宮式年遷宮奉賛会東京都支部から私どもの地区にも募 中野区で真言宗の寺院ですので、 星野 ある家に寄附を依頼に行った方からの話ですが、「なぜ 松山宮司さんのお話をお聞きしまして、 伊勢の神宮の遷宮もあと数年と真近ですので、 昔から隣がお宮、 私の自坊は 八幡神社

ィアで見ているだけですと、なかなか伊勢、伊勢神宮という 人々との間にしっかり作ってやっていかないと実際の地域 勢神宮の日本における現代風の役割とか、伊勢との関係性を り今の神崎先生のお話のように、この機会にお伊勢さん、 感覚のズレも仕方ないことなのかもしれません。これはやは 寄附の依頼を言って廻る総代の方と募財を出す各戸の側との たこともないのに」と逆に恨み節を言ってしまったり、また 知っていますが、若い人たちは、 寄附を募りに廻っているお年寄り、 レベ ルでは理解されない難い訳です。 お伊勢さんについて「行っ 総代さんは昔のことも テレビなどメデ 伊 Ó

0 がわからない。

大変だからあんなところへそうは簡単に行けない。とりあえ きたいんだと。 御府内の八十八箇所を廻るほとんどの人が、本当は四国へ行 先ほど申し上げた四国八十八箇所巡礼の話に戻りますと、 しかし四国を巡礼して廻るというのがとても

ずは、ここ東京の御府内の八十八箇所を最初にお参りしてと

いうふうな気持ちがあり、

そのような重層化されている仕組

の崇敬、 ょっと、ここ戦後六十年くらいの間で少し途切れてきたので 社と末社のような感覚だったんでしょうね。 広めたりしましたので、最初はそういう連関性の中で神宮 よね。さらに中世以降、 行って、それこそ「飛び神明」と呼ばれる神明社かあります さんだって実際に過去に遡れば、 み、心層的なものに大きな意味がある訳です。多分、 聖地性が培われてきた、神宮と神明社がいわゆる本 御師が随分、 お伊勢さんが各地に飛んで 御祓大麻や伊勢参宮を それ がやはりち お伊勢

櫻井 そうですね

はないですかね

なってしまっているのかも知れません。 では全くないと思います。 のようなつもりでお伊勢さんも今回の御遷宮をやってい レベルでは、 星野 先ほどのような事例ではありませんが、 結果的に寄附の割当が来たという発想、 しかし、実際の末端の神社 逆に各家々では何で 寄附 0 、る訳 割

れませんね。 関連というものをもう少し突き詰めてやっても面白いかも知 のも手かも知れません。 だから、この機会に一つ、その関連性を作ってしまうという 係ないじゃ ですので神明宮でもないし、そうすると氏子からは「全然関 えば私の住む氏子区域は八幡神社の氏子ですから、八幡さま 住職の立場からも地元の人たちに説明がしにくい訳です。 なかなか理解してもらえないのかも知れません。私のような 大神宮とか伊勢神宮、 俺らに割り当てられるんだと。 ないか」という言い分があるように思いますね 神明社というわけじゃないですから、 旅との関連も含め、 例えば氏子区域の神社が東京 伊勢と日本人の 例

だと思うんですね 現代社会はメディアが聖地を作り出しているところもあるん 所なんだという話が出てくるかということです。その意味で 神社や寺院へ非常に沢山の人がやってくる。そこが大事な場 めますと、やはりメディアが何かを言うことで、 と思うのですが、 出 もう少し私は抽象的な聖地に対しての話に戻したい 今のお話にもちょっと関わりながら話を進 ある場所

だから、

聖地論でよく言われるのは、

聖地というのは元々

関わる聖地の問題というのは、

歴史的にはどうなっているの

などはそれを「聖地感覚」とされている。 との持っている意味が聖地 あるんだと。 るものは固有で、 よく「聖地は動かない」と。 それは場所の持っている力だという発想 だから、あるところが聖地だったけれ なんだと。 だから、 聖地が人に喚起 動かない 鎌田 東二 خ درا 、うこ

突然出てきてそこが賑わったり、巡礼とか伊勢の抜け参りと かといったようなものが出てきたのかどうか。 的なものによって急に、例えば「はやり神」みたい るときに、 前の時代、 随分でき上がっていくということで、 旅が文化・文政のころになるともうかなり、名所図絵とかも にお聞きしたかったのは江戸時代に、こういう巡礼というか、 かなり大きな問題としてあると思うんですが、私は神崎 と思うんですね。 後で人間が人為的に作ってきた場所という二つの立場がある 問的に言うと、そういう固有な力を持つ場所という言い る、というようなことで、聖地をどう見るかについても、 ども、百年経てばその場所は誰も人が来ないということもあ ていくものであって、 方と、いや、聖地というのは絶えず変わっていると。作られ それには多分、現代社会だとメディアの報道ということが 大きく言うとメディアだと思いますが、メディア 江戸時代という時代の中でも、 現代でなくてもう少し やはり聖地を考え そういう旅に なものが



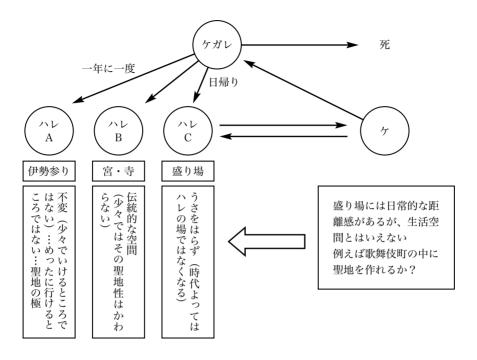
か、是非お伺いしたいと思うのですが。

てしまう。そんなことわざはない。歌謡にいつでも置きかえ ない。それが短絡化すると「名物にうまい物なし」で止まっ ということで封じ込めて顧みなかったんですが、やはりこと 日本の場合はかなり普遍的原理であった訳です(笑)。 はり旅に出るというのは、まずは食い気と色気。というのは、 ぱり食い気の夫婦」と、こうなるわけでしょう。だから、や 食うが極楽。しょせんこの世は食い気に色気、このごろさっ られる五音七音の四行立てが基本にならなければいけない。 わざというのは絶えず我々が繰り返して検証しなければいけ 理原則を普遍化したものだろうと思います。戦後、古くさい とわざ」だろうと思います。ことわざというのは、物事の原 とえば、今我々が一般に論じるときに忘れているのが、「こ だから、そこで聖地論をもう一回整理してみるとこうなり そうすると、「名物にうまい物なし。ありとするなしとて 歴史的に定型化できないと思いますけれどもね。た

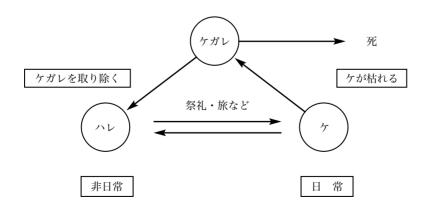
と「ケ」としてきたでしょう。ケから離脱するハレ。だから、 さんの茶卓を貸してください。 ませんか。余り単純化すると叱られそうですが、ちょっと皆 ハレの中に祭りがあり、旅がある。これは当たり前です。そ 民俗学のこれまでの概念では、図2のように単に「ハレ」

れで、ここへ、第三極にケガレを置きます。つまり、日常の

### 図 1 神崎流 聖地の考え方



### 図2日常・非日常性論に関する従来の聖地をめぐる考え方



ケが れを日常へ戻すためにハレの空間においてハレの体験をす 枯れた、これを放っておくと死に至る。そうすると、

こと。こういう循環性があると思います。 る。それによって、もとの気に戻る。つまり「元気」という

と思い出したんです。たとえば、盛り場へ行って飲み食いを いていて、聖地にも俗に近いものと俗から離れたものがある、 なるか。図1のようになります。今、実は先生方のお話を聞 ところが、そのハレの時空間にABCがあるとしたらどう ウサを晴らす。そうすると気が元に戻る。そうしら盛

り場聖地論もできる訳です。

する、

的空間へ身を転じる。そうすると、ここでもある程度のリフ それから、お宮さん、お寺さんへ行って歴史が刻んだ伝統

月に一度のお多賀様という諺がある通りです。 が代表的です。一生に一度の伊勢まいり、年に一度の氏神様 寺の空間 神社・仏閣とすれば日常的にも往復できる。祭りにあわせて レッシュが図られて、元に戻る。これを身近なところにある - これは一年に一回くらいはそこへ行く。それより遠い社 は、 また別枠としましょう。一生に一度の伊勢参り

物理的 あるのではないか、 はりめったに行けないという歴史的なイメージでの距離感が な距離だけではない。 聖地に対しての距離感の違いがある。それは とは思いますが 我々の心象の距離。 ですが、

や

うものはそう簡単には作れない。 に作ることはできないということになりますね い気と色気の空間はできても、 っても聖地は動かないと。 星野 聖 |地というのは、よく言われていますが宗教 今の先生の話でいけば、 聖地そのものを歌舞伎町の中 歌舞伎町のど真ん中には食 聖地とい が変わ

歌舞伎町はある意味、 神崎 ただ、言い方が悪いので叱られるかも知れませんが、 非常に低俗な聖地、 ハレの空間である

ことには間違いはないですが(笑)。

星野 それはそうですね

櫻井 それを一体に論じてしまうと、 一種のハレの空間であることは間違いない いわゆるここで扱う

神仏等々、関係の深い聖地と、ちょっと違ってくるわけでし

ょうね。ただ、神崎先生が今、

聖地の類型、モデルをお示

ているというのが現実であった。 に多様な聖地としての興味を引きつけるものというのを持つ 戴きました。一生に一度というその聖地が、 歴史的にもそうですよね 実際にはこの中

くるのかなという気も致します。 聖地であるがゆえに作られていったという部分が多分に出 それは、聖地自体が自ら作り上げてきたというのでしょうか

皿としての多様な楽しみ方というのが生み出されていると思 の外宮がありますが、 例えば伊勢の場合ですと、両宮、 宇治も山田も同 つまり宇治 時に人々が !の内宮、 訪れる受け

話を戴きましたが、この遍路をめぐる方々にとってと、 を戴けたらと思うのですが。星野先生、先ほど四国遍路のお いうのがどのようなあり方を示しているのかという点でお話 いますが、今度はそうして聖地を訪れる方々の視点で聖地 それ

٤

星野 受け入れる方というのは地元の人ですか。 を受け入れる方々というのは、どういう関係にあるのでしょ

うか。

はい 地元。

### 旅人を迎える 現代の旅行とは?

などを渡してあげるのですが、その「お接待」というのは最 接待」というのがあって、本来は食べ物や飲み物、手ぬぐい 路で今でも残っているお遍路さんに対するおもてなし、「お 説や接待をすることによって功徳を積むということで四国遍 だと。だから、 には弘法大師が一緒に歩いているような思いで歩いているん う笠を被り、つまり一人で歩いていても常にそのお遍路さん なくて、弘法大師と一緒。歩いている人は「同行二人」とい 際にお遍路を巡礼して歩く人は単に一人で廻っているのでは 四国遍路の場合だとそれは各寺の信者さんです。 巡礼のお遍路さんは弘法大師の化身だという 実

近ではかなりお金が多くなっているんですね。お金が多くて、

り、 ういうことではなくて信仰上そうだということです。調べて ビジネス的に言えば、お金も落としてくれるわけですが、 ある訳です。それはビジネス的に歓迎するというのではない。 を歩くお遍路さんは当惑しつつも、皆喜ぶわけですが、 とに代わってきている。これは今でも残っていて、当の遍路 百円とか、それをお遍路さんにお供えとしてあげるというこ 四国ではお遍路さんが来ることを歓迎するという慣習

すね。 もとにかくお遍路さんを歓迎するということはあると思いま うなことを言う人が多いですが、非常にそういう意味で今で お金をあげると。 地元の人は、実際、聞かれればそういうふ

なんて思う地元の人は少なくて、実際は激励の意味で接待の みると、今時は、お遍路さんに空海が一緒に歩いているんだ

が。あれは、「施行」というのでしょうか。 いり」などでは種々のもてなしが沢山あったと聞いています それを当てにして行く人もいて、必ずそういうのは増加して いくところもあるし、お伊勢まいりでもかつての「おかげま ただ、かつてはもっと遍路の道中に食べ物などがあって、

ど出て、 っていてというのがありますよね。伊勢や四国だけでなく、 櫻井 星野 絵図などでも「施行」の炊き出しみたいなのも山ほ 確かに。 貰う方、 お伊勢まいりでは「施行」といいますね つまりお参りにいく参詣者の方も柄杓を持

野田泉光院の日記など見ると、そこら中に行って泊めてもら そういうお接待、もてなしの文化というものは、昔はどこの 御祈祷しては、タダで泊めてもらっているんですね。 聖地にでもあったんだと思いました。昔の山伏の人、

ありますね。俗謡もある。

そうですよね。

四国遍路でも何かことわざがあるんですか。 先ほど神崎先生がことわざに注目しておられました

それは色々あると思いますが、ちょっと今日は資料

を持ってきませんでしたね 櫻井 −1生に一度お遍路に行きましょうとか、そういうの

ポイントで、観光地の持続性は成り立つと思うんですよね。 地というのは、リピーターがどれくらい来るかということが 多分、これは山中さんの範疇になるのかと思いますが、 すが、それ以外に物凄く著名な温泉が沢山あるわけでもない いですよ。温泉といっても道後温泉など有名な温泉もありま も単に四国っていうことで行ってみても何も面白いことはな のは廃れてしまうので、言い方は悪いですが、四国なんかで だから一回だけ来て、もういいやというのでは観光地という はないでしょうか。 星野 ことわざじゃないけれど、つまり観光地というのは 剣山や石鎚山はあっても険しくて。特に風光明媚で美し



ると思いますが。 山 「があるわけでもないし、 何が楽しいのかということにな

ですから、何度も来たいという気持ちを出させる仕掛け

غ

いうの

すと歩いている人が非常に多くなって、二十年くらい前なん 歩いている人には都会の人が多いですよね。かつてと比べま れはスペインのサンティアゴと同じで、 明批判とか、そういうものの価値観があります。だから、 といいますか、ポスト脱工業化社会の自然とか環境とか、 が大切なところです。 現代は非常に、 実際の聖地を訪れて やはり脱都市化 ے 文

てほとんどいなかった。

のは今、 十二日くらいで十二~十三万で行けるんですか。歩くという 四十万かかる。 って、そうすると四十日で早い方で、 て歩くと少なくとも一日一万円くらいかかるんですね。 わけですから、 ところが、歩いて聖地 非常に時間もかかって贅沢なことんですね(笑)。 四十日間休暇が要る。バスで回ると、十一泊 家から歩いたので今は飛行機でそこまで行 に向かうというのは、 一気にやると四十日で 昔は皆歩い 泊 ま っ た

度が充実したからよ」といっていました。「年金制度がなけ 先生ね、 こんなに四国は人が来ないわよ。年寄りにお小遣いが 何でこんな巡礼がはやっているか知ってる?年金制 時間がお金になる社会ですから逆にね ある八十八箇所の寺のおばあちゃんなんて、「星野

だろうかというふうになると……。

思いつかない。

か。

結局、

う実際に物凄く大きなことだと思いますね というか、これは実は非常に大きな意味があって、それはも あるからだ」と。 やはり先ほどのような形で社会制度の充実

消費というのがそう度々はできないわけだから、これが特殊 うんですね。距離と心象の問題だけじゃなくて、 それに対して一生に一度というのは、やはり多額の消費を伴 がありますよね。先ほどの身近な聖地、 神崎 お金の消費というものをもう一回、 あるいは低俗な聖地 考えてみる必要 その多額

化するんでしょうね。

十両以上は持っていますよね。そうすると一軒の家の生活費 ての代参だから、関東から伊勢へ行く場合は一人分として二 行っていない訳です。 オタオタしている現代人と、どちらが神仏を崇めながら旅を 充実というか、気分の充実がはかれる。それと数十万ほどで の二年分でしょう。それだけのお金を使うということは 江戸時代の伊勢参宮だって、 伊勢講を組織して、 講の積立金

する充実感があるかというのは、 てみてもわかりますね。 山中 では今の社会に置き換えてみてどうなんでしょう 一生に一度の聖地というのが今の我々はなかなか じゃ、 自分にとって一生に一 これは、 お金の価値で計 度の聖地って何

個人の資金だけではほとんど

今は、大学がそれに相当するかも知れませんね。

出

代の大消費なんです(笑)。 大学の入学金、学資を入れたら、 やはりそれは 世

なっていたんじゃないかと思うんですね。 の聖域に向かって組織されるといいますか、そういうふうに 高揚した気分もあるだろうし、さまざまなものが伊勢の神宮 の祈りを預かった責任感もあるだろうし、 とになるかもしれないから覚悟もあるし、それから村人個々 参という形で行くということで、それは本当に生涯一度のこ 講では相当なお金を貯めて、そしてそれを何日もかかって代 あればお伊勢さん、さっき神崎先生が仰ったような形で伊勢 出 消費って観点でいえば(笑)。だから、例えば昔 長旅へ出たという

て行き易くするということがあると、その分だけ聖地の持っ 例えば近鉄ができたり、 ってしまった。つまり近代には参宮鉄道などの鉄道網の整備 も勿論そうですけれども、非常に簡単にアクセスがし易くな 場所ですね。それを今ですと、そういう場所でもお伊勢さん の端にある、 けれども、やはりサンティアゴというのは本当にヨー っきほど星野さんから、サンティアゴの話などが出ています ところが現代を考えてみると、例えばヨーロッパ 中世であれば本当に行くのに大変な苦労をした あるいは様々なものが聖地 、の例、 に向か -ロッパ さ 9

ていた一生に一度性みたいな価値がなくなってくる。

希少価値が、そうですね

出

聖地の希少価値がなくなってくる。一体どこに、

て、常に再生産、社会の中で聖地性というのが作られていく。 要するに特別で、そこでしかないものだという議論ではなく うんですね。だから、その点で聖地論の中で、聖地というのは となると、非常に困ってしまうということがやはりあると思 ういう希少価値としての聖地というのを見つけたらいい

で

うような形ででき上がっていく。 とが、それぞれの時代の中での人々の心の持ち方みたいなも さっき星野先生が仰ったようにリピーターというか、やはり か、行きやすいように組まれているのも不思議なことです。 が聖地というものがこれだけある種、 のを表明しているというところがあって、現代の場合、そこ 聖地をめぐる表象といいますか、聖地をどう見るかとい ときは心の中の何かだという言い方かもしれませんし、 生に一度じゃなくて何回も来てもらわないと困りますとい それは、あるときはある特別な場所かもしれないし、 商業化するといいます うこ ある

観光産業も物凄くそこに苦 先ほど申し上げた 大きく言うと下五

島と上五島という二つのエリアに分かれますね。上五島とい

五島列島、

普通は五つの島ですけれども、

慮している。

例えば私が今調査している例で言うと、



元々、聖地なんていうことは考えていませんから、ある意味 うのは飛行場がない。ですからアクセスが非常にしにくい。 賃宿、工事従事者が泊まる場所しかない訳です。 っていますから、大体は工事に従事する工員たちが泊まる木 宿泊施設は基本的には海浜の護岸工事をずっと公共事業でや

くいがゆえに聖性があるんだという、ちょっとそういう言 方は社会学的過ぎるかもしれませんが、その行きにくさが逆 地が持っていた聖性というか場所の特殊性、かつての行きに は考える。またそうじゃないと人は来ないという点です。聖 ターを、あるいは定住してくれる人というふうに観光サイド そんなことで受け入れる側も非常に困っている訳です。 の中になくて、どこか宿の建物の外の別のところにあるとか。 まり観光客には適していない。だから、来て見れば便所も宿 ですね。ところが宿泊施設と言えば、先ほど言ったようなあ そうすると行政は、その国宝の教会を一つの売りにして、 で新上五島町というところは、観光事業の展開をしているん 「世界遺産に出会える島、上五島」というキャッチフレーズ そのときに考えることは、やはり施設を充実させてリピー ところが、その上五島には国宝の素晴らしい教会がある。

やはり、

も間違いなく観光地ですね。ですから、その意味でも聖地を ゴでも、ルルドでも、 異なっている。例えば、先ほどから話が出ているサンティア であったりするかもしれませんが、それはかつての聖地とは でき上がってくるんだとも言えるわけで、それは南海の孤島 なる。だからこそ、 ものが、 逆に非常に聖地をめぐる観光にとってはハンディに また聖地は行きにくいところにどんどん ヨーロッパでいうと、 聖地というより

伊勢の場合は非常に特殊ですよね。歴史を遡ってみても、 値をとどめている聖地論はまた違うので、その意味でいえば、 そこでもう一つ、マスツーリズム(大衆化された観 の問題がある。 マスツーリズムの聖地論と、 希少価 沂

が致します。

めぐる問題というのは、色々な問題が言えそうだなという気

からの収入で成り立っていた訳です。ということで、伊勢は 各御師の雇用者を入れるとトンでもない数になります。 ント会社となる御師だけでも六百数十株ですから、それらの か。やはり江戸期の伊勢は観光城下町ですよ。旅行エー がらマスツーリズムの娯楽性を加えてあれだけ観光地化した たんですよ。それがなぜ伊勢に限っては、 交通、徒歩の旅でも、そんなに行きにくいところでは 世で既にマスツーリズムの対象だった。伊勢は、江戸の街道 師に雇 われていた人たちは結局、 外から来る観光客 聖地性を維持しな なか その ジェ つ

> 二種類がある。伊勢の場合は、 その制度化された方式を御師が商業活動の中で巧みにしたと れども、村にとっては毎年、リピーターの制度によって行く。 た。だから、個人にとっては伊勢は一生に一度なんです。 営ということでこの二種類を巧みに利用した旅が作られて と、その地域から顔ぶれを変えて毎年行くリピーターとい リピーターというのは、その人個人が何度も行くリピーター さらにもう一つ、先ほどから出ているリピーターの問題 御師が介在しての伊勢講の運 う

特殊な聖地といえるでしょう。

伊勢を盛り立て式年遷宮を盛り上げていくためにも必要なの るのかは別としても、 のか、役所に求めるのか、 神崎 だから今、そういった方式をエージェントに求める いずれにしても平成の御師たる才覚 あるいは神宮さんそのものに求

ではないか、と思いますね。

行う。 う形で新しい熊野参詣曼陀羅をつくって、 ということで、 調査していますが、いわゆる熊野比丘尼が絵解きをしてい 出 ンのイベントがあったようですが、ある意味、 東京でもこの間 なるほど。 熊野の方は観光協会が現代の熊野比丘尼とい 熊野三山だと、 その参詣曼荼羅のデモンストレーシ 私の指導学生もちょっ 出張して絵解きを 絵解きをし

 $\exists$ 

いうことが、私は現代と違うと思うんですね

櫻井 なるほど。

のは、 い。紙芝居程度のものでしか感じ取れるようなインパクトし たちには面白いなとは思っても、それ以上は心情的に動かな どうしても参詣曼陀羅を使ってココがと言われても、今の人 お話、現実に身近に感覚として入っていくものではないので、 ょっと姿を変えさせて出てくると。ただ、その世界観そのも デアなんですね。つまり一応、 て、教えていくということで、それはそれなりに面白いアイ 、やはり残念ながら今の人たちにとってはそうリアルな 伝統的なエージェントを、 5

かないんですね。 マンというのは、 神崎 だから、やはり御師のような布教者というか、 やはり芸が要るんですよ。芸といいますと、 広報

の芸を持って旅を勧誘するということが、現代でも大事なこ 伊勢大神楽をはじめとして色々な芸能がある。やはり何らか る芸もありますが、のたたき売りみたいな芸もある(笑)。 師が持っていた芸を見直してみたい。芸というのは修業によ 町づくりが始まっていますね。だから、そういう意味での御 ろで、たとえば、道成寺絵巻を解く芸などは大したものです 名前を出すのがいいかどうかわかりませんが、現存するとこ 道成寺はそれによって歌舞伎役者も取り組んで、門前の

自体は、

先ほど神崎先生が仰るような形の講、

種の布教努

ですよ。それで、伊勢と厳島の両社の歌舞伎興行をして帰っ 歌舞伎役者は江戸時代、 伊勢と厳島で興行したん とだろうと思います。

伝えるんです。そういう芸のやりとりの、あえて言う芸の系 そうすると、歌舞伎役者は必ず帰ったらそのことをどこかへ 持ち出すんじゃなくて、逆に、芸のある集団を呼ぶんですよ。 興行ができるようになりました。これはその土地の人が芸を 伎小屋の建物が残っていましたから復活して、今では歌舞伎 は、どうですか。金毘羅大歌舞伎、 てきたら、江戸の歌舞伎役者は一人前として認められる。 あれは金丸座という歌舞

やはり遷宮に合わせて松竹の歌舞伎興行を呼ぶくらいのこと 歌舞伎小屋を今から作るのはさすがに大変ですが、 統が、例えば伊勢などでも再現されてもいいかもわかりませ

んね。

道体制」で廃止になりますね。その後も特に伊勢の神宮さん 星野 御師というものが、 明治になっていわゆる 国

る。我々世代の責任だと思いますね。

をやったらどうか。そういう伝統をきちっと日本に知らしめ

今はその伝統的な講はないんですか。 力というか、信者集めの努力をしなくてずっと来ましたが

す。ただ、 神崎 櫻井 伊勢講にかぎらず、寺社詣での講は各地 神崎先生、これはどうですか 戦後は、 というより高度成長期は、 自動車交通

に残存しま

発達もあって観光ポイントが多くなり寺社詣ではそうした娯

ますしね。 ての御師や僧侶に比べるとおしなべておざなりの傾向にあり楽の隅の方に追いやられた感もします。神職の応対も、かつ

**星野** 山中さんの恩師である井門富士夫先生などは、前から宗教教団の組織にとっては半僧半俗みたいな方なんですのところもあるわけですが、そういう人が必ず教団とか宗教のところもあるわけですが、そういう人が必ず教団とか宗教のところもあるわけですが、そういう人が必ず教団とか宗教のところもあるわけですが、そういう意味の表には正しいんだということを昔、今でもそう言ってらったがますが、力説をされています。私も多分それが正しいんだと思うんですね。

なというふうに思いますね。 
ですから、そういうのはどこの仏教宗派でも、仏教でも、 
なのか在家なのかよくわからないけれども、少なくとも一 
らと。そういうのが多分、お伊勢さんのように日本の中心に 
うと。そういうのが多分、お伊勢さんのように日本の中心に 
から人は信者を持っていますから教団の方もそれなりに扱 
から人にちが「先生」と言って崇め奉られる先生がいて、そ 
般の人たちが「先生」と言って崇め奉られる先生がいて、そ 
と言って崇め奉られる先生がいて、そ 
のというふうに思いますね。

スのし難さという問題ですね。それについて伊勢の場合です聖地というものが持っている、聖地への行きにくさ、アクセ櫻井 今のお話を聞いていまして、少し戻りますけれど、

動を意識されている方々の意識を含めて、 動について今日は福祉文化論の立場から板井先生に、 志摩バリアフリーセンターという団体がありますが、その活 いう点で地元で参詣の支援活動をされています。NPO ンサンクチュアリ、 はなくて、例えば障害者の方々、身体的な事情で一番のメイ ができなかったという方々、 と現代では、 神宮へお参りしたいけれども、 御正宮へたどり着けないというか。 それは経済的とかそういうので 紹介して戴ければ なかなかお参り その活 そう 伊勢

## 聖地とボランティア

と思いますが。

「トラブル(trouble)」という意味が含まれているのであれば、 害を持った方たちに注目し、ホストとしてはそれを受け入れ ぐって活動していくのかということに興味を持っています。 ていく立場のボランティアの方たちが、どのように聖地をめ れるのかということです。特にゲストとしての高齢者や 的な聖地へのアクセシビリティというのはどのように考えら アクセシビリティ 行きにくさが聖性を高めるというお話をされていたのですが 板井 もともと旅行を表す英語の 私自身の興味・関心は、 (近寄り易さ)という言葉を使うと、現代 「トラベル(travel)」 先ほど山中先生が聖地 0 語源に への

ターというNPO法人で伊勢神宮参拝ボランティアに関わっ それをサポートするために伊勢志摩バリアフリーツアーセン て、行き易くなったがゆえに、これまでアクセスし難かった たと思いますし、 旅はまさに骨折りの連続であってトラブルはつきものであっ 人たちも近寄り易くなった、ということだと思います。 現在それが無くなったということではなく 私は う言葉をかけて戴きました 非常に満足なんだということで、 ないと思ったと。ここまで来られただけでも自分にとっては を合わされるんですね。もう二度とここまで来ることはでき 方が介助を丁寧に断りながら、その石段の下で涙を流して手 このときに、一体この人の涙を聖地をめぐる現代的

最後に「ありがとう」とい

な課題

が非常に純粋であるということが挙げられます。 たけれども、伊勢神宮に対する、聖地に対する思いというの その活動の中から見ますと、まず一つは訪れて来られる方た 先ほども「心の聖地」というキーワードが出ていまし

ています。

参拝を経験されていてその後車いすになった方たちが、 印象に残っている事例を挙げますと、修学旅行の時に神宮 何人

か一緒になってあらためて神宮参拝をしたいということで、

「じゃ、参りましょうか」と申し上げたら、 ね。僕らはもう息が切れていて、もうハアハア言いながら、 いく中で最後に残った方が結構体格の大きな方だったんです ア皆で車いすを持って上げるんですけれども、順番に上げて 最後、三十数段の石段がありまして、その石段をボランティ 我々にボランティアを頼まれました。内宮の御正宮の前には、 その方が「もう

私はい

いから」と言われたんです。

恐らく我々に対する気遣いもあったと思うんですが、その

うことを実感しています。

拡大ということにも繋がっていくのではないかなとい

らこそ、残っているのかもしれないと考えています。 す。そういった純粋な心を支えあうような体験が、聖地だか ました -94ろが今も私の研究をするモチベーションになっているんで として捉えた時に、どのように解釈できるのかなというとこ

ての潜在的な魅力を含んでいると思っています。 が、一方で、障害者への参拝支援というのはマーケットとし それから先ほど経済的な側面ということもござい

ということが、連動してマーケットの拡大と参拝者のリピー とか、高齢者の方たちの祈りに対するアクセシブルを高める ことが考えられます。そういった障害を持った方たちである とか、周りの人たちも一緒になってそこにやってくるという てですが、お一人ではなかなか旅行しませんので、その方が アクセスしやすいということは、 というのは、障害を持った方たちというのは高齢者も含め 家族であるとか友人である

ドの泉なんていうのは、障害者が一番威張っているところで のボランティア組織が、そういう人たちを連れてくるんだと 人がいますが、あれは多分、パリとかイギリスとか教区の中 ドの水で水浴びをさせてもらうんですね。そこを調べている つ、作っているんですね。基本的にはあそこへ行って、 すね。キャスターつきのベッドがある歩道のわきに、もう一 板井さんのお話を聞いていて思いましたのは、 ルル ルル

者というのは実は我々の象徴なんだというような考え方です かベルナデッタという人は我々の苦労を背負った人で、障害 教的には、日本で言うと「代受苦」みたいな形で、マリアと ゆえにルルドは病気のある人、傷病者で、それはかなり宗

> 障害や高齢者という人たちを取り立てて考えてしまう、 化財に対する考え方ということもあるのかもしれませんが、

いわ

**-** 95 **-**

思うんですね

ても、すぐに皆が手伝ってくれる。階段があれば、「おまえ、 って行きやすいんですね。 中で感じることなのですが、海外に行くと聖地は障害者にと いますので、そういう方たちの体験談とか、一緒に同行した ないような、古い言い方をすると御利益があるというような ことが多分にあると、非常にいいんじゃないかと思いました。 ィキャップのある人がお伊勢さんに行くと非常に他の所には これからの時代、 板井 最近、 海外に出かけていく障害者の方たちが増えて だからやはり傷病者、 みんなそう書きます。どこに行っ 障害のあるハンデ



と声をかけられながら担 いで上がってくれるわけ どこから来た。日本人か」

ア団体をつくらなければ ってわざわざボランティ と行きにくくなってしま いけない。ここに何か文 それが、なぜか日本だ

ら 構自由に漂泊をしていた時代もあったわけです。「瞽女」で 遍的に考えていってもいいような、そういうキッカケを持っ のかということを考えることと、もう一方で何か、もっと普 あるとか「座頭」が作ってきた旅というのもあるわけですか 教えて戴きたいのですが、障害を持った人たちというのは結 ゆる狭義の慈善的な考えに陥ってしまうというところを、 ょっと変えてみる必要もあるのかなと思います。 例えば民俗学的に歴史を見たら、それは神崎先生などにも 何か取り立てて高齢者、障害者を聖地はどう受け入れる

神崎

中から、 乙でさえも劣等感を持つ、甲以外は一人前でないように世間 をしていると思います。身体検査で甲種合格が幅をきかせ ですね。 これは明治から後の徴兵制度が、 また我々の考えるような旅の分野から抜け落ちたん かなり大きな作用

れば、 いているというように歴史的には見た方がいいのではないか から、そのつなぎとしてNPO、ボランティアグループが働 の人たちに対する平等意識が日本でも出る可能性はある。 から見られるという。そういう一時的な摺り込みが払拭でき もう一度、マイノリティー、つまりここでいう障害者 だ

と思います。

だから、私は性急にその制度的な整備を求めることはない

と思うんですね レプラ道(レプラ=ハンセン病のこと)もあったからだろう を盛んにしたのは、これは大きな軸ではないけれど、やはり と思うのですが、星野先生がよく御存知のように四国の巡礼

私は愛媛から高知までそれを歩いてみましたが、

すでに途

中ほとんど歩けないところがありました。しかし、 であったというように思えます。若い人たちの研究やボラン があったように思います。 が四国はある程度可不足なく旅ができたという特殊な装置系 る種差別的な扱いを受け忌み嫌われたハンセン病の患者たち できることは、 ンセン病患者たちにとっては大きな魅力 一般の動線とは違っても四国巡礼 往時 あ

> れる時代が来ると私は思っているんです。 ティア活動によって、 旅における平等性がもう一度呼び戻さ

明治以降の社会は、

政治的、教育的に特に神道、

信仰に対

必要もあるのかもしれませんね。たとえば昨年の九月でした か、戦前に戻す必要はないのだけれど中庸に戻す。そういう する問題がちょっと極端に語られすぎたし、 れすぎましたね。しかし、そういうことを中庸に戻すという 一転して閉ざさ

長い。となると、やはりこれは仏教界も一緒に、日本人の信 がら協調する。そういう時代になったのでしょう。 合した状態の歴史が、明治以前が少なくとも明治以降よりは ノを言うのではない、神道、仏教がそれぞれにモノを言いな

「神仏霊場会」のような活動も生まれている。

神道のみでモ

か、華厳宗大本山東大寺の森本公誠長老が音頭をとられて

仰というような問題を見直すという、

その動きも私は評価

なければいけないと思います。

は言ってみれば山に入る人々で成り立っている場所ですね。 いう集落があって、これは本当に山伏さんたちの集落で、そこ 訪れる人が少なくなっていて、その麓の手向(とうげ)地区と 山もかつては沢山の人が参詣していたんですが、昔より随分 出 それは私も昨年、 出羽三山を訪ねたときに、 出 靭三

非常に宗教的な雰囲気を持ったところで、しかし、とにかく

歓楽街みたいな話とは全然違う。

宿坊街ですので、

-96-

仏様と神様が一緒になって巡礼というようなこともやってい仏教系の夏の峰と神道の夏の峰と分けてやっているわけですから、もう一度戻した方がいいんじゃないっていたわけですから、もう一度戻した方がいいんじゃないかというような議論も出始めているようで、それの刺激になかというような議論も出始めているようで、それの刺激になかというような議論も出始めているようで、それの刺激になれば、かば、神仏分離の結果として今も「夏の峰」というのをやる際に、神仏分離の結果として今も「夏の峰」というのをやる際に、神仏分離の結果として今も「夏の峰」というのをやる際に、

うのはその意味でいうと、それに応えられるだけのキャパシということが受け入れられていくという中で、宗教文化とい以上の広がりを持って、人々の中に素直に「ああ、癒しだね」というような話。全体的に観光ベース野もそういう「癒し」というのがこの何年かずっと言われていて、熊して「癒し」というのがこの何年かずっと言われていて、熊ですから、そういう現代社会の中で、やはりキーワードと

ティーは持っていると思うのです。

例えば、神仏霊場会のように様々な祭典やイベント

0

参拝者が非常に減っているということで、出羽三山も明治

くるための一つの手段だろうと思いますね。 に全く違和感はないわけですから、少なくとも民間の信仰のに全く違和感はないわけですから、少なくとも民間の信仰のに全く違和感はないわけですから、少なくとも民間の信仰ので神職と僧侶が同席、協力するというのは、歴史的、文化的で神職と僧侶が同席、協力するというのは、歴史的、文化的

山中 そんな感じがしますね。そのバリアフリーということで聖地にアクセスをし易くするというボランティアの動きなことで変化してしまった訳で、それはそれで大事な面もあなことで変化してしまった訳で、それはそれで大事な面もあなことで変化してしまった訳で、それはそれで大事な面もあなことで変化してしまった訳で、それはそれで大事な面もあなことで変化してしまった訳で、そのバリアフリーということで聖地にアクセスをし易くするというボランティアの動きとで聖地にアクセスをし易くするというボランティアの動きとで聖地にアクセスをしますね。そのバリアフリーというこ

のが

有難いという意味では、神道、

仏教の共働も考えたらど沢山の人が山に来て戴く

ころはあるけれども、共にお山を繁栄させるといいますか、いきさつは過去のいきさつとして譲れるところ、譲れないと

一つの聖地として考えたときには、

る」と。こちらも明治以前、

以後の神仏関係をめぐる過去の

うかという話が出ていると伺いました。

星野 そうですね。

みると面白いですよね

いろな問題がもっとあると思うので、そういうことを考えて

# 伊勢の神宮と修学旅行

**櫻井** 近代の中で、伊勢の神宮の位置づけはよく議論されるいは伊勢神宮へ今度参拝に行きますのでお立ち寄り致しまない。田御師のところにお札をお願いできませんかとか、あから、旧御師のところにお札をお願いできませんかとか、あから、旧御師のところにお札をお願いできませんかとか、あから、旧御師のところにお札をお願いできませんかとか、あから、旧御師のところにお札をお願いできませんかとか、あから、旧御師のところにお札をお願いできませんかとか、あから、旧御師のところにお札をお願いできませんかとか、あから、旧御師のところにお札をお願いできませんかとか、あから、旧御師のところにお札をお削いできませんかとか、あから、旧御師の様子を見てみますというのもあるんです。

それがずっと記録を調べてみますと昭和十五~十六年まで。「ええ?」と言って驚きました。そと言って驚きました。そんのお家に自分たちの地域で伊勢講を組んでい
、そこで積立金を持っ

てそちらへ渡すと、旧の

ところが、戦後、地域社会が大きく変わってまいりますと、れるという、そんな関係を持っているんですね。御師さんがお伊勢さんの方からお札を、特別許可を得て送ら

大きく変わったというところに、これから、参宮のあり方が大きく変わったともに社会でいるということも見受けられるのではないかなと思っています。しかしそういう変化があっても、御師の性格という変わってしまったのではなくて、強弱がありながら連続しているということも見受けられるのではないかなと思っているのです。ただ、社会そのものが出なくなる社会になってしまったれを受け入れる広さがあります。しかもこの両面はすっから変わってしまったのではなくて、強弱がありながら連続しているということも見受けられるのではないかなと思っているということも見受けられるのではないかなと思っているのです。ただ、社会そのもの、地域構造の変化であり様があったというというない。

思うんですね。つまり現代では、どういうふうに聖地にアクこに多分ツーリズムというような問題が関係しているんだとして代参が行われたりするという話がなくなったときに、そあるいは出羽三山のお社は一体何なのかと考えたときに、じっていく。つまり共同体をベースにしながら、そこの信仰とっていく。つまり共同体をベースにしながら、そこの信仰とっていく。つまり共同体をベースにしながら、そこの信仰と

どうなっていくんだろうなという感じが致します。

アピールをしているということです ーリズムという産業が色々な形で加工しながら人々に対して セスするのかということを考えたときに、そこにはやはりツ

え直した方がいいんじゃないかなというふうに僕などは思い 余り考えないで、もうちょっと積極的な意味合いをつけて考 くかといったときに、ツーリズムというのは単なる遊びだと 共同体をベースにしていた信仰がどうやって今後発展してい した信仰というのがなくなっていくプロセスの中で、じゃ、 あるわけですから、いずれにしても旧来の共同体をベースに かアクセスをする必要のためにはインフラ整備とか等々色々 っていくかということを考えると、そこにはやはり宣伝力と 個々の旅人の体験ですから、ただ、行くまでどういうふうに持

坊さんが黙っているのに「皆さん、信仰とは…」なんてこと んというのはとてもお坊さんよりある意味で〝立派〞で、お るし、功徳も説きますしね。四国なんかでも、バスガイドさ 理店でしょう。 御師とかそういうのは、一つは今でいえば、旅行代 旅行代理店の人というのはかなり道案内もす

カリスマ・ボランティア・ガイドですね。地元の人 そうですね。 それともう一つは、 国土交通省が行 5

択肢の一つというような

を言って説法風のことさえ行いますね

つまり行ってしまえば、そこの中でどう感じるか、それは 育成に力を入れていることは事実としてあります。 語れるようにする必要があるんだということで、随分、その 体も実際問題として地域をよく知っている人が地域の言葉で たちの旅行ガイドを沢山育成しようと補助金を出して、

島の話でいくと、隠れキリシタンの家系の方が、今カトリッ とに着目しなければならない時代かもしれません。例えば五 ツーリズムの時代は終わっていて、やはりもっと個別的なこ という、さっきマスツーリズムの話が出ましたが、既にマス だから、恐らくそういうエージェントが外から連れてきて

と思う。その気持ちが非常に旅のクオリティーを高めるとい そこで「うちのおじいちゃんがこの石積みをつくったんです クの信者になっていて、その方が教会を案内してくれると。 よ」と言われると、「ああ、なるほど。御苦労されたんだな」

う話ではなくて、連れて行った後に何を感じさせるかという。 **星野** 今、修学旅行がそうですね。体験学習というのがあ

好をするとかね。そういうのもあるんですよ。 ってね。中には田植えをしたり、京都へ行って舞妓さんの格 神崎

でしょう。それ メージを与えているんじゃないですか。修学旅行が激減した その修学旅行が、伊勢などの場合はやはり大きなダ は団体旅行ではなくて拡散しても、 伊勢も選

うことで。だから、単純に連れていけばそれで終わりですとい

**単野** 昔は参宮旅行といって、随分行ったみたいですね。

大事だけれども。 うことを感知するのは大事なことなのでしょう。体験学習もそういう聖地がある、俗な日常性とは別のところがあるといー 神崎 だから、それは小中学校の年齢で修学旅行なんかで

校は二泊三日くらいで大体、京都・奈良が多いですね。道とか、あるいは海外とか色々なところへ行きますが、中学いと実は思っているんですね。高校になると沖縄とか、北海ですよ。僕は日本の仏教を支えているのは、修学旅行が大きを異野 修学旅行ではいまでも、中学校は今でも京都・奈良

が少し教育現場ではよろしくない。が。今は大分違っていると思いますけれど、恐らくイメージか。だから、仏教はいいけれど伊勢となると少し、というのか。だから、仏教はいいけれど伊勢となると少し、というの山中 でも、日本の教育現場で、やはり歴史の記憶という

星野 そうかもしれないですね。

いうことに。残念ながら。 山中 だから、伊勢まで連れて行ったとなると、それはと

星野 先生方の中ね。

神崎 だけれど、そういうことも見直しの一つで、これからって。

ら考えなければいけないと思いますね。



題にも取り組んでいますが、宗教教育が必要とはいってはみ えるかということ一つ取ってみても、実際にはほとんどその いえば、具体的なことになると神道をどうやって中学生に教 ても、現実として、どうやって学校教育に反映させるのかと だというので日本宗教学会などを含め、「宗教文化士」の問 今、山中さんなどと一緒に宗教教育というのを必要



とはほとんど出て来ません。ある意味歴史教育では、もうタ モデルがないんですね。高等学校で神道が出てくるところと いうのは、縄文時代の次くらいに出てくるんですよ。そのあ

ブーになっちゃっているんですよね。 ンティアに参加して戴いている方の中には、 板井 一つ、皮肉な言い方かもしれませんが、伊勢でボラ

すね。 げましょうか (笑)、というような方も多くいらっしゃいま 説明までしちゃうと。ついでなら車いすもご正宮まで持ち上 教えていたのかはわかりませんが、今は積極的にお迎えして らは非常に伊勢のことを話したいし、案内、紹介をしたいと 者の方が多くて(笑)、教員でいらっしゃった頃は実際どう された観光ボランティアガイドも沢山いらっしゃいます。 いうモチベーションを持っているのですが、結構、教員経験 山中先生が紹介

題はもう少し解放されないと、日本文化を語るときに非常に を感じるような、 神道とは何かという教えられる部分と、もう少し実際の聖地 べらないというのは。 まずいですよね。一切かかわらないという、知らない、 **櫻井** そういう点では机上の中で、あるいは教室の中で、 そういう旅をプログラムの中に組んで戴く

星野 本当になかなか今、神崎先生が仰った通り神道の問

とよく見えてくるのではないかと思います。

のあの環境だけでもね。ですから、神宮、 らしい所だと思う人の方が、ずっと多いと思いますね。 私は伊勢というところへ実際に行ってみれば、 伊勢にも行ったこ 神宮 素晴

とがない人が多いというのは、非常に残念です。

と思うんですよね ね。そうすれば、なおその素晴らしさが感知しやすいだろう うことさえも、アドバイスがなかなかできていないんですよ とにかく、神宮へ早朝とか日没時にお参りするとい

# これからの旅のゆくえ

ばと思ひます。どなたからでもどうぞ。 で、今の学校教育とか、教育の問題等を離れてお話し戴けれ 旅というのはどういう新たな文化を創りあげるかという点 らせて戴くに当たり、 櫻井 そろそろ時間になりましたので、この座談会を終わ 先生方に簡単に一言ずつ、これからの

うんですね。だからこそ旅の中でそういうものを確認すると ィが確立するという時代ではないでしょうが、そういう意味 しているの いう機能は失われないと思います。今、 のアイデンティティが確立するということが旅にはあると思 僕は、やはり先ほど冒頭で申し上げたように、 箇所、ここに行けば皆が全てアイデンティテ 非常に価値は多様化 自分

> 0 では旅というものが、私はこれから必ず、ドライな都市社会 中で一層盛んになるんじゃないかなと思っておりますが。

要するに普通の旅というのは現代社会の非常に窮屈で管理的 のが大きな意味を持ってくるだろうと思います。 う側面は現代社会が益々複雑になればなるほど、旅というも 解放という観点というのが旅の中にはあって、その解放とい な生活の中で、それから離れていくという。つまり、やは その区別をあえてすると、それは私の説ではありませんが、 者によっては、旅と巡礼は一緒だと言う人もいるんですが、 マの中になっていて、そのときにそれをどう区別するか。 出 最近とにかく、旅と巡礼という話が色々研究のテー

戻っていく。あるいは中心に向かう方向性を持ったものだと なもの、心の中心にあるものに向かっての旅というのが巡礼。 イメージが持てるかどうかは別としても、 ことが必要で、 何だろうかというものを探していくというような、そういう 分のよりどころというか、自分にとって一番大事なものって 言って、これもやはり現代社会が複雑になればなるほど、 巡礼というのは心の、 と考える。つまり、普通の旅は外に向かっていくのに対して、 もう一方で、巡礼というのをある人は自己の中心への旅だ 先ほどの神崎先生の一生に一度というような 自分にとっての一番大事なところへと 自分にとって大事

だから、その巡礼も旅も、両方ともその意味でいうと現代社

ないかと思っています。 から考えてみるということは非常に大きな意味があるんじゃ 研究というか、旅という問題を学問的に、 ということが可能になるという意味で、 り方というものを見る。 う意味でツーリズムというものの隆盛を通じて、人の心のあ 業がツーリズムというようなものである訳で、だからそうい るものだろうと思っています。それを外側から支えていく産 会という中においては非常に大きな意味をますます持ってく あるいは、 現代社会のあり方を見る 私はこのツーリズム あるいは色々な観点

らめて旅というのを。 櫻井 神崎先生、どうでしょうか。 最後に、 神道文化とか

と思います。 を継いで探求するのも、 いと思います。 私は、今日話の出たリピーターについて考えてみた 私の近い尊敬する先代たちがやり残したこと 私がリピーターとしての努めだろう

がない所はほとんどないわけでありまして、

いのですが、やはり歴史的に遡っても一宮というのは、

が晩年、

それで、神道文化について言いますと、

話人類学の大林太良先生にもかわいがられました。大林先生 ったんですね。これは明治以前に設定された社格には相違な 東京女子大学もお辞めになってから一宮巡りをなさ それはトポスの問題なのか、あるいはマインドの 私は妙なことで神 宮のそこにあ

問題 私も誘われていましたが、十分なおつき合いをしてない。こ き始められたんですが、完結をみないでお亡くなりになった。 なのか。 大林先生は「私の一宮巡詣記」という記事を書

いのだろうと思います。 一人一人が、やはり子供を神社へ連れて歩かなければいけな は何ができるとは思いませんけれども、 親が許すところで何人かが一緒に動いてくれたら、これに私 学生くらいが何人かに声をかけてみようかと思っています。 たような感じで、それをもうちょっと私は小学校高学年、 ですが。その一宮巡りは大林先生が私に声をかけてくださっ 日本がどうなっているか、私の体力がどうなっているか問題 れを継いで、是非やってみたいと思います。 一宮巡りもできるんじゃないかなと思うんですが、その時 それで、私個人のもくろみからしますと七十歳を過ぎれ 可能性がある。我々

景にした神社に優る場所は

時間もまいりましたので、それではこれで終りにし

ないはないかと思っております。

あるいは秀麗な霊峰を背

が築いてきた鎮守の森に囲まれた、

ます。旅を共有すること。 持ってもらうのには、 い中庸的な日本の伝統性、文化性ということを考える素地を

私は旅を共にするしかないと思って それにはその対象が伝統的に我々

子供たちにどこかで神社に対する知識を、

極端に右、

左でな

修学旅行が現在のような形で神様離れをする傾向にあれば、

戴き有難うございました。 たいと思います。 皆様、 今日は長時間にわたりましてお話を